

遠見 小江島
眺輝 碧海灣
踏破 山頂宝
観青 椈松登

登山

厚木市 荒井 一雄

玉垣こそ
あふぎみければ その昔
巫女に恋せし日々もありけれ
大山に登る
青(緑)の椈や松を親ながら
遠い登り、やつのこと
で宝玉の山頂を踏破した
まぶしく輝く碧の相模
湾を眺めれば、遠くには、
なんと小さく江の島が見
えるではないか・・・

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城 (34)

春眠不覚曉
処処聞啼鳥
夜來風雨声
花落知多少
〔孟浩然「春曉」〕
春の眠りは心地良く、
夜が明けたのも気づか
ない。耳を澄ませばあ
ちで、鳥の囀り耳にす
夕べの風でどれほどの
花はハラハラ散ったの
か)

「春眠曉を覚えず」……
この時期にぴったりの漢
詩です。ほんやりと空を
眺めながら、ふと口ずさ
んだ方もおられるでしょ
う。口語訳は七五調にし
てみましたがいかがでし
ようか。
四月に入り、うららかな
日ざしが大地に降り注
いでいます。ヒバリやメ
ジロなどの小鳥の声は、
いつしか子守歌となって
ウトウトと眠気を誘い出

します。
四月は「卯月」とも呼
ばれます。これは「卯の
花」や「空木」が咲く月
からとも、また稲の苗を
植える月(植月)から名
付けられたとも言われて
います。私たちは今、麗
しい春の息吹に包まれて
います。
久方の
光のどけき
春の日に
静心なく
花の散るらむ

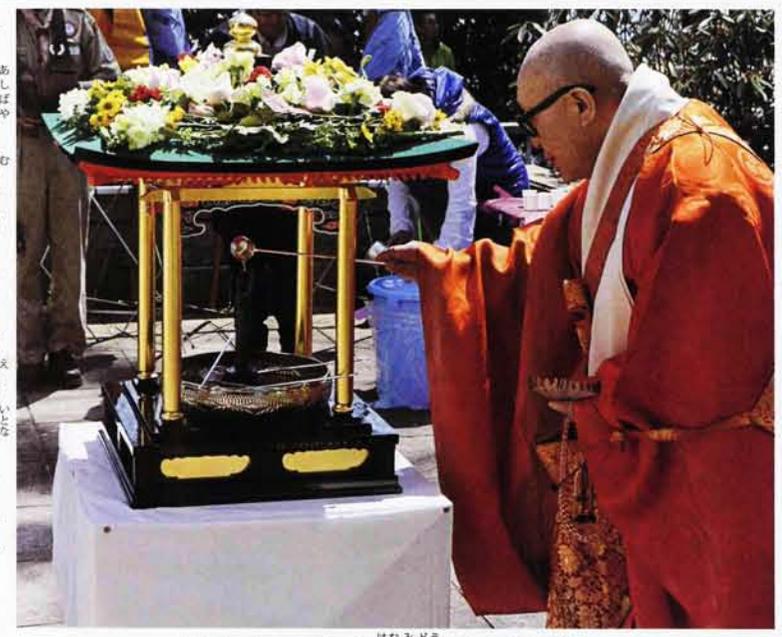
〔古今集〕紀友則〕
日の光が穏やかな春の
日に、どうして桜の花は
落ち着くこともなく散る
の(だろ)う
いつまでも心安らかな
日々が続いてほしいと願
いながらも、冒頭の漢詩
のように、春の嵐が花び
らを連れ出します。時節
は止まることなく、初夏

折り折りの記(68)

小屋掛けの日本舞踊や花吹雪

波多野 重雄

西行も病の身を春まで、と念願成就したほ
ど、花と人とのかわりは深い。高尾山に桜
が咲けば、ケープル広場に小屋掛けして、春
昼、玉簾や蝦の油の品師らで賑う。
花の色が日に染まるころ、踊娘さんの日本
舞踊に観客は陶酔し拍手喝采。くれそむ高尾
嵐の花吹雪は一幅の絵をかます。家路のケ
ブル客は、花の野外劇場に花の垣となる。
(高尾山健康登山親睦会々長)



「花まつり」の時には、花御堂に甘茶が注がれる

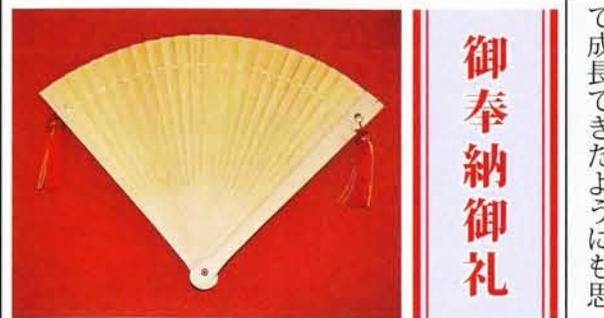
へと足早に向かっている
のでしよう。
季節の変わり目に行わ
れるお寺の行事に「花祭
り」があります。これは
旧暦四月八日(今年の新
暦では五月二十五日)の
お釈迦様の誕生日をお祝
いするお祭りです。高尾
山薬王院においても、毎
年四月八日には仏舍利塔
において「花祭り」の法

会が営まれます。
お釈迦様の誕生日は、今
から約二千五百年も前に
遡ります。摩耶夫人とい
う女性が昼寝をしていた
時のこと。六つの牙を持
つ白い象(白象)が胎内
に入る夢を見ました。夢
から覚めると、自然に身
ごもっていることを知り
ました。
四月八日に至り、摩耶

夫人は出産のための里帰
りの途中で、ルンビニー
(ネパールの南部)の園
に立ち寄ります。そこで
美しい花を手折ろうと枝
に手を伸ばした時、夫人
の右脇からお釈迦様はお
生まれになったのです。
するとすぐに立ち上が
って七歩踏み出し、右手
で高く天を指し、左手で
深く地を指して、言葉を
発しました。
天上天下
唯我独尊

この世界に私よりも尊
いものはない
この時、天地は揺れ動
き、妙なる音色とともに
天から多くの神々が降り
てきました。お釈迦様の
頭上には香湯(良い香り
の水)が注ぎ、小さなお
身体は金色に照り輝いて
いました。
〔仏本行集経〕など〕
お釈迦様の「天上天下
唯我独尊」という言葉は、
この世の苦しみから、人
々を普く済おうとする強
い思いから言い放たれた
ものです。「四苦八苦」と

いう仏教語があるように、
この世は、自分の思うよ
うにならないこと(苦)
で満ちあふれているので
す。
ところで「四苦八苦」
の「四苦」とは、「生・老・
病・死」の四つを言いま
すが、なぜ始めに「生」(生
まれること)が入ってい
るのでしよう。新たな命
の誕生は喜ばしいはずな
のに、何か不思議な気が
します。
この「生苦」については、
鎌倉時代の説話集に、次
のように記されています。
人は、母親のお腹の中
で三百日、あるいは二百
六十日も包まれているけ
れど、いざ生まれる時に
は、例えば生きた牛の皮
を剥ぎ取って、棘の道を
通るような苦しみがある。
また柔らかな蒲団で受
け取ったとしても、赤ち
やんととつてみれば百千
の剣で切り開かれるよう
な痛みがあるのだ。だか
ら赤ちゃんの初声は「苦
かな、苦かな」と聞こえ
るのだよ。



御奉納御礼

八王子市にお住まいの
増山進・史子御夫妻より、
新しく檜扇を御奉納頂き、
御礼申し上げます。
この檜扇は、御護摩供
修行の際に修法する御導
師が、護摩壇の護摩木に
点火された浄火を益々と
大きな炎にして、煩惱を
焼きつくす為に使われ
ます。
現存最古の檜扇は、京
都・東寺のものとされて
おります。

他にも「生苦」につい
ては、生まれる時には冷
たい風が身に触れて、そ
れは地獄と同じような苦
しみであるからとも言わ
れます。
〔頼瑜「秘蔵宝輪勘注」〕
こうした話を読みなが
ら、自分はどうだったの
かと考えますが、もちろ
ん思い出すことなどでき
ません。ただ、生まれた
ことよって喜びととも
に苦しみも経験し、それ
を乗り越えることによつ
て成長できたようにも思

人間はもちろん、全
命あるものは、様々な苦
しみをくぐり抜けてきた
と言えるのかもしれない。
生老病死苦
以漸悉令滅
〔法華経〕
観世音菩薩普門品
(生老病死の苦しみを、
すっかり消滅させる)
季節の移り変わりを観
じ、ただお経を一心に唱
えます。
(栃木北部教区普濟寺中)